

---

# 灰色少女

南雲アリス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色少女

### 【Zコード】

N2174Z

### 【作者名】

南雲アリス

### 【あらすじ】

このお話は灰色の瞳と髪を持つ少女が実は、お姫様だったというお話。このお話には、変態騎士や真面目すぎるお兄様、ドジっ子な護衛、俺様な魔法使いなど、個性豊かなキャラクター達がいっぱい出てきます。暇だったら読んでみてください。他サイトと重複投稿です。

## プロローグ

私は、エリアナ＝ウェルム。どこの村や町にいっても嫌われる。まあその事はそれなりに事情があるから仕方がない。私が嫌われる理由は2つある。

1つ目は、私の髪の色と瞳の色が灰色だからだ。この国には、髪の色は金髪や茶色といった色が多い。瞳の色は皆深い緑色だ。だから私はこの國の人間みんなから嫌われる。

2つ目は、私は動物や木と話せることができる。猛獣から小さい可愛い動物。私の身の回りにはたくさんの動物がいる。だからみんなは、動物と話せることができる私を怖がっている。

だから私は親にも捨てられたのだろう。灰色の瞳と髪。動物と話せる。今まで仲良くしていた人も動物と話せると言つたら気味悪がつて私の元を去つていった。

でも私にも仲良くしてくれる人は一人はいる。そのひとは、エドガー＝アザック私の小さい頃からの幼馴染みだ。一緒に洞窟を探検したり薬草を探してくれたりした。私の兄弟みたいな人。

「エリー。イノシシ捕まえたからエリーの特製シチューを作つて」「いいわよ。エドガーは下準備をしてきて。」

彼は一週間に3、4度くらい肉を分けてくれる。ちなみにエリーとは私の愛称だ。私は愛称で呼ばれるくらいの親しい人が居ないからとても嬉しい。

「エドガー。ここにくる事をなにか言われなかつた？」

彼は容姿端麗で性格もよくて村人全員に好かれているから私のところにくると彼の評判が下がつてしまつ。

「村長とフィアカに『あんな呪われた娘のところにいくなつ』って言われた」

多分村長の娘のフィアカはエドガーが好きで、村長はあわよくばフィアカとエドガーを結婚させるつもりだ。エドガーは、こんなところにいるよりもフィアカと結婚した方がましだろう。

「エドガー。ここにくるのが嫌なら来なくともいいのよ」

ここに来ないのもエドガーのためだ。でも本当にエドガーが私のこと好きだったらエドガーは傷つく。そしてこんなに優しくしてくれた人を裏切つて傷つく権利はないと思うけれど私も傷つく。

「嫌いなんかじゃない！」

彼が怒鳴った。エドガーが私に怒鳴るときは決まって私がネガティブな事を考えて言葉に出したときだ。もう、こんなやり取りを何回も繰り返してきた。

「……『めんなさい…。私、貴方に迷惑をかけていると思つと…。』

「『めんな。俺も怒鳴つて。』」

そしていつも私達がお互いに謝つたあとタイミング良くあいつが来る。ドアが開いた。

「あら～あなた達また喧嘩をしてたの～？まあ悪いのはその薄汚い女だと思うけれど～？」

「フィアカ…」

またこいつだ。いつも私達が喧嘩した後にタイミング良く現れる。こいつはエドガーをストーカーしているんじゃないのか。村人達に美人だとおだてられ育つて世の中を知らずに気取った性格になつて育つた。彼女はフィアカ＝アルガン村長の娘。私の宿敵。

「エドガー様～。こんな女と遊ばずに私と遊びましょ～」  
「俺これからエリーにシチュー作つて貰うからムリ」  
「そんなつ！シチュー作つてもうなんて！毒が入つていたらどうするんですか！」

失礼な女だ。私は何回もエドガーに料理を振る舞つたりした。もし私がエドガーに振る舞つた料理に毒を入れようとしても私には毒を買つお金がない。

「おい！ フィアカ失礼だぞ！ 謝れ！」

「何でですか？ 私はエドガー様の身を案じて…」

「フィアカさん出ていって下さい」

私がフィアカを追い出そつと腕をつかもうとしたとき。

パシッ！

「何をする！ 汚れるからさわるでない！」

フィアカに頬をビンタされた。私が啞然としているとエドガーが怒鳴つた。

「フィアカ！ この家から出ていけ！ 一度と来るな！」

フィアカの顔がどんどんと泣き顔になつていく。いい気味。フィアカはエドガーが好きだから余計悔しいだろう。でもどうせこの後

私は呼び出されみたいじめられる。

「ひどいですわあああーお父様に言いつけてやりますー！  
『悪いのはそちらですか』

フィアカはドアに向かつてドスドスと歩きだしたと思つていいたらフィアカが振り返つて私に聞こえるくらい小さな声で言つた。

「西の廃墟にて待ちますわ。三時に来なさい」

「わかりました」

私もフィアカに聞こえるくらい小さな声で返事をする。

バタン

ドアが閉ると同時に私は床にヘナヘナと座りこんだ。エドガーが心配して駆け寄つてくる。頬から血が出ている。フィアカがビンタすると見せかけて爪を立てて引っ搔いたのだろう。

「エリー！大丈夫か？！」

座りこんで泣きじゃくる私をエドガーは私が泣き止むまで優しく抱

を締めてくれた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

## プロローグ（後書き）

初投稿デス。

誤植とかあつたら教えて下さい！

よろしくお願ひします。

## プロローグ2

\* \* \* \* \*

フィアカと約束をした3時が来た。

「エドガー、私動物達に餌をあげにいくね。5時くらいには帰つて  
くるから。」

「じゃあ俺もついてくよ」

いつも私はフィアカに呼ばれたときはエドガーに嘘をつく。本当の  
ことをいつたらエドガーはきっとフィアカを殴りに行きそつだから。  
あれでもフィアカは女の子だから顔に傷痕が残つたら可愛そうだ。

「ごめんね。最近森にハンターが出入りしているから動物達が警戒  
しているの。」

「じゃあしようがないな。行つてらっしゃい」

最近は私が出掛けるときにエドガーはいつも私の家にいる。自分で  
言うのもなんだけど私達が時々夫婦みたいに思える。はっきりいつ  
てとても恥ずかしい。

「行つてきます」

西の廃墟は村の近くにある森を五分くらい歩いていくとある。元は二階建ての家でそこのは昔村人の集会で使われてたとか……。でも今は、幽霊が出ると噂になつていて。

「遅いわよ」

そこにはいつも私をいじめる人達がいた。でも今日はやけに人数が多い。

「兵士様。こちらが城のメイドになりたいと言つヒリアナ＝ウェルムです」

「なつ！ フィアカさん！ なんのこの人達！」

「いいわよ。最後に教えてあげる。」

フィアカは珍しく勿体ぶらずに教えてくれた。まずはこの人達が城の兵士だということ、そして今城ではメイド不足であること。フィアカが適任した人物がいると兵士達にしゃべったこと。

「兵士様達わね、この際異形のメイドでも良いですって。よかつたわね働き口が見つかって」

「さあ。エリアナ＝ウエルム行きますよ」

フィアカは本気だ。自分の都合のいいように自分が確實にエドガーを見てに入れれるよう。この女狂つてる。

「いやつ！ 放してっ！」

私は兵士達に腕を捕まれ引きずられる。エドガー助けて！ 心の中で祈つても彼は来ない。私が余りにも暴れるから兵士達は私の鳩尾を殴り私の意識はそこで途絶えた。

\*

\*

\*

\*

\*

## プロローグ2（後書き）

うわあ～い

すごく短い！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2174z/>

---

灰色少女

2011年12月7日22時51分発行